

- 1 ルードウィク・ラーハ編著 金子マーティン訳 凱風社 2009年8月 2,500円+税
- 2 インド発祥のロマ民族は複数のグループから構成されていて、そのひとつがシンティである。シンティは中世後期から中央ヨーロッパに定住してきた民族であるといわれている。

10月26日(木)、18時30分より、松本治一郎記念会館にて、『シンティ女性三代記 私たちはこの世に存在すべきではなかった』の著者ルードウィク・ラーハさんを招いた講演会を開催した。この本の訳者である金子マーティンさん(日本女子大学教授、IMADR理事)の通訳による講演を以下に報告する。

報告:『シンティ女性三代記 私たちはこの世に存在すべきではなかった』 著者ルードウィク・ラーハさんに聞く会

一寸木純子(IMADR-JC)

ラーハさんのこと

ルードウィク・ラーハさんはオーストリアの首都ウィーン郊外に位置する、オーバーエスターライヒ州で生まれた。文筆家であるとともに、ドキュメンタリー映画の制作者でもある。彼の作品の中で最も有名なのは、『心筋退化症』である。ナチス時代に設置された、「ジプシー収容所ワイヤー」に関するセミ・ドキュメンタリーだ。『心筋退化症』は架空の病名だが、収容所でシンティ²が死亡した際、診断書に書かれていた病名である。ドキュメンタリーは2001年に発表されたが、その制作の際に三代にわたるシンティ女性家族に出会い、「シンティ女性三代記」執筆の構想が生まれた。家父長制で、年長者を敬うシンティ社会の中で、三代にわたり、一人ひとりがシンティであることに向き合い、自分らしく生きている姿を描くことで、多くの人にシンティについてより身近に感じるきっかけになってほしいという思いが、本に込められている。

シンティの人びとの暮らし、 ローザが生き抜いた時代

1923年にローザは誕生したが、1850年頃から始まった差別は、ロマの人びとの存在自

体を否定し、警察がロマの人びとの名前をまとめ、罰するほどだった。ロマの人びとの暮らしは主に、馬車で移動しながらの暮らしで、どの家族も多産で大人数であった。シンティが大切にしている考えに、川や魚、

花も人間と同じものとして捉えることがある。だがヨーロッパでは、それらは土地や財産の1つとして考える。こうした考えの違いが、差別や偏見としていまだに続いている。

1935年にナチスが台頭し始めて以降、豊かだったシンティの暮らしは一変する。その頃から移動生活のない冬にのみ学校に通っていた子どもたちの通学も禁じられ、1939年頃から、多くのシンティやロマが競馬場の厩を収容所として収容された。1つの厩に15人が押し込まれ、女性や子どもにも建設工事の労働が強いられた。しかしシンティの人たちは最後まで、自分たちが収容所へ送られるとは思ってもいなかった。

1940年、スペイン人の映画監督が自作の映画「低地」のエキストラを探すため、収容所へやってきた。ローザもエキストラの一人として選ばれ、70人以上のシンティがエキストラとして、山地の農園で暮らした。終始監視はされていたものの、収容所の暮らしよりは十分な食糧が与えられ、楽園のようだったとローザはのちに語っている。

ある日母から「別の収容所へ移るかもしれない」と手紙をもらったローザは、逃亡を決意するが、3時間後に捕まり、刑務所へ連行され、そこで母に再会する。謝罪を求められ、最後まで拒否し続けたローザは強制収容所へ連行された。

強制収容所では1日の食糧がイモ2個、厳しい労働が課せられ、雪の降る寒い朝に屋外に立たされていたローザたちに看守が冷たい水を放水し、続いてお湯がかけられた。服従をしないものは懲罰棟に入れられ、食事は3日に一度。1日中椅子に座るだけの生活を3週間も強いられた。

ある夜、ローザが自分のエプロンを窓枠に干したところを看守に見つかり、犬に体じゅうを噛みつかれ、さらに看守もローザをめった打ち。だがシンティ女性2人が命ごいをしてくれたおかげもあり、ローザは一命をと



ラーハさん

りとめることができた。自分の尿で傷を洗い流したが、今も傷痕は体中に残っている。

その後、ローザはバート収容所へ移される。そこでは、病気になると元の収容所へ送り返されたが、戻ってくるものは一人としておらず、何千人もの人びとが餓えでなくなっていくのをローザは目にした。

そしてついに6人のシンティ女性とともに逃亡し、苦難の旅を経て故郷オーストリアへと戻ってくることができた。国境を越えたときは心から嬉しく、地面にキスをした女性もいたほどだった。その逃亡劇の際にシンティの男性グループと出会い、そのグループにいた男性とローザは結婚した。

第二次世界大戦後、ローザの家族で強制収容所から生還できたのは、ローザと二人のいとこだけだった。またオーストリアはナチスの被害国と認められたが、シンティに対しては行商の許可書を求めても発行しなかった。国籍も戦争中に多くの証明書を失ったことを理由に奪われ、シンティは無国籍となってしまった。

ギッタの時代:母から受け継いだもの

1946年に生まれたローザの娘ギッタは、幼い頃友だちが祖父母や親の兄弟について話していたことで、『なぜ自分の親はそのような話をしないのか』、『祖父母はどこにいるのだろうか』と父親に聞き、初めて自分の親族の多くが収容所で殺されたことを知る。

ギッタの子ども時代はまだ、キャンピングカーで移動しながらの行商生活だったが、ギッタと弟2人も学校に通い、学校が休みの時のみ、行商の手伝いをしていた。ギッタはとても成績優秀な子どもだったが、中学を卒業する3か月前、父が行商の営業許可書を持っていないとの理由で逮捕される。そのせいで「逮捕されたシンティの子と一緒に授業を受けさせたくない」と保護者から学校に苦情が届き、ギッタは成績証明書をもらうが、卒業することができなかった。

ギッタはのちに16年かけ、ロマやシンティに対する戦後補償を訴え続け、母であるローザの国籍を復帰させることができた。1991年のことである。ローザにはオーストリアの国籍が再発給され、オーストリアのパスポート、収容所に拘禁されたことに対する補償金、月々の年金を受け取ることが認められた。しかし、最後まで結婚したことは認め

られず、結婚前の姓への改名を命じられる。このとき、多くのシンティが改名を求められ、多くのシンティの姓が消滅した。

このギッタの大きな貢献から、多くのシンティがギッタに助けを求める

ようになる。そこで、ギッタはシンティやロマの差別をなくすため、1998年4月、「シンティとロマのためのケタニ協会³⁾」を設立。社会的な運動だけでなく、シンティやロマの文化を守り続ける活動、映画製作、20世紀におけるシンティやロマ迫害の資料集めもしている。

ニコルの時代:シンティとして生きる

現在、「シンティとロマのためのケタニ協会」の代表は、ギッタの娘であり、ローザの孫娘にあたるニコルが務めている。ニコルはシンティにとって自由な時代に生まれたが、ニコルや若いシンティは多数派社会に同化するか、または先祖たちのことを大切にシンティとして生きるかの選択に悩んでいるという。

オーストリアでは、1998年にロマが暮らす村に「インドに帰れ」という立て札が立てられ、それを外そうとした時、爆弾が爆発し、4人のロマが亡くなるという事件が起きた。これを受けオーストリア政府は、ロマやシンティに対する支援を強化し、多くの子どもたちの学業成績が上がり、高校や大学へ進学することができるようになった。

小さな村から起きたことだが、このような悲しい出来事からではなく、もっとロマやシンティに対する支援や理解を深めることは、他のヨーロッパでもできることだろう。ロマの人びとは自分たちの国家を作ろうとは思っていない、ただ自分たちのことを自分たちで決める権利を認めてほしい、自分たちの存在を理解してほしいのだと、ラーハさんは最後に語った。(ちよつき じゅんこ)



3) ケタニとはシンティの言語であるロマネス語で「共に」という意味である。

「ナチス体制下におけるシンティとロマの大量虐殺」
アウシュヴィッツ国立博物館常設展示カタログ(日本語版)発売中
ロマニ・ロゼ編 金子マーティン訳
2009年IMADR-JC発行

ご注文は、ウェブサイト:
<http://www.imadr.org/japan/publications/other/>
あるいはIMADR-JC事務局まで